



# 抹消か、再生の道か… 死刑について考えてみませんか

東京拘置所のそばで死刑について考える会「そばの会」

東京都荒川区南千住一―五九一六―三〇二  
<http://sobanokai.hamamizake.com/>

二〇一九年七月一八日に京都市伏見区の京都アニメーションの第一スタジオにガソリンをまいて放火。社員三十六人を殺害し、三二人に重軽傷を負わせ、殺人容疑などに問われていた青葉真司被告に、一月二五日、京都地裁は死刑の判決を言い渡した。だが青葉被告は大やけどを負い、いまや歩くこともできない。車椅子の彼がいかなる運命を辿るか：『青葉真司は歩けない。歩けない死刑囚をどうやって刑場へ連れていくのでしょうか』判決が確定した際、実際にどう執行されるのか？刑場では立ったまま首に皮のついたロープがまかれ、執行される。踏み板の大きさをロープの長さなどから、刑場は立ったままでないとい、執行が難しい構造になっているという。『死刑と人権』（かたつむりの会）参照

青葉被告は医師、看護士の手厚い看護を受け意識を取り戻した時、人の恩を知った人間として涙を流して感謝した。そこから人としての人生が始まる、と思う。



遠藤裕喜被告は二〇二一年一月山梨県甲府市の放火殺人事件で一九歳の犯行、二一歳で死刑判決を受け弁護人が控訴しても翌日自

ら取り下げ死刑が確定。沈黙を続けていたが十二回公判で「社会に戻るつもりがないからです」と発言。閉ざした寡黙な心を解放する出会いに巡りあってほしい。刑務官でも面会を求めている支援者でも。

人の人生は本当に一ミリの差で決まる。紙一重だ。一分前には何もなかった感情の動きで、「あの時あなかつたら：」「あそこへ行かなかつたら：」：殺人に至り自死に至りもする。わずかな一瞬で、その人の人生が左右される。何があるうと人の生命を奪ったりしてはならない。森達也氏（作家、映画監督）は言う。「犯罪は三つの不足から起きる。一、幼児期の愛情不足 二、成長期の教育不足 三、現在の貧困である。それを補うのが社会の役割であり刑罰だ。」明確な分析だと思う。

遠藤裕喜被告が確定後どういう変化をみせているのかわからないけど、青葉被告にも遠藤被告にも幼少期から成長期には虐待、差別、貧困：の生活環境しかなかった。それでも、もちろん人生を健全に全うする人もいる。しかし二一歳の遠藤裕喜被告になんとか再生の道を選んでほしい。

誰にでも生命を全うするまで生きる権利がある。(T)